



発行所(〒371-8666) 前橋市古市町1-50-2
上毛新聞社
電話 市外局番(027) 254-9933 (編集)254-9933 (広告)254-994
(販売)254-3131 (事業)254-995 (印刷)254-9985 (出版)254-996
(ディ)254-9881 (発送)254-998 (総務)254-9977 (総合)254-991
©上毛新聞社 2005年

桂川 平成17年11月
関東信越国税局
鑑評会優秀賞
☎027(285)2005
http://www.katsuragawa-sake.co.jp
E-mail joshu1@po.sphere.or.jp

読者センター
☎ 027-254-9922
FAX 027-251-4334
Eメール houdou@jomo-news.co.jp
群馬のポータル
http://www.raijin.com

紙面ガイド

朝青龍が史上
タミフル備蓄、達成に2年(2)
伊藤衆院議員が仲介(3、4)
はやぶさ岩石採取「成功」(4)

「繭のまま染色したのでは、

中まで染料が届かない」。そんな生糸染色の常識を覆す新しい技法が、大間々町のニット工場で生まれた。開発担当者の千明敏彦さん(47)は子持村中郷が上州座繰り器を回すと、赤と青二色のカラー繭から引き上げられた生糸は、深みのある紫に色を変える。どんなに座繰り器を回しても、糸の色は薄れない。新技法で繭の奥までしっかりと染め上げているからだ。

巧みな手さばきで座繰り器を扱いながら、千明さんは穏やかに語る。「養蚕農家のおばあちゃんたちに随分とお世話になった。何か恩返しがしたくてね」。その一心で打ち込んだ研究が、ようやく実を結ぼうとしている。

四十七年間の半生。振り返ると、いつも身近に繭があった。生家は養蚕農家。祖父母は早く亡くなったため、千明さんと二人の弟も大事な働き手だった。掃き立て、桑取り、上簇。春から秋にかけては、遊ぶ間もなく手伝った。

冬になると、母は上州座繰り器で糸をひいていた。あめ玉のご褒美がうれしくて、作業を手

ぐんまルネサンス 第1部

23 カラー繭

養蚕農家に「恩返し」

旧県立農業大学校を卒業し、洪川市の組合製糸「豊巻社」に就職。赤城村の養蚕農家百六十軒を巡回し、飼育指導をするようになった。以後、数え切れないほどの養蚕農家との交流が始まった。

「養蚕をするおばあちゃん」と話をしながら、技術を教えたり、逆に教えられたり。昔話や庭木の話も楽しかったなあ。養蚕が花形産業と呼ばれた、ほのぼのとした時代だった。しかし年月とともに、環境は一変。輸入生糸が出回り、国産繭の価格は下落を続けた。親しくしていたおばあちゃんたちは、少しずつ養蚕から離れていった。

豊巻社も経営が行き詰まり、一九九九年三月に操業停止。千明さんは松井田町の碓氷製糸農業協同組合を経て、中之条町に上州座繰りの工房「蚕糸館」を開設。今年六月からは大間々町の

のニット製造販売会社「ミラノリブ」に勤め、座繰り糸の研究を行っている。

長年の仕事で、養蚕農家の苦悩を間近に見てきた。そこで一つの考えが生まれた。「付加価値のある生糸を作ることができれば、外国産と関係なく高値で売れる。その利益を養蚕農家に還元できる」。付加価値のある



染色新技術で付加価値

この技術により、一本の生糸を複数の色の繭で作れるようになり、これまでになく複雑で深みのある色合いの生地が織れるようになった。また、この染色方法は生糸の表面にセリシンというタンパク質を残すことができる。セリシンは紫外線を遮る効果があり、医療や宇宙開発産業への転用も期待されている。

千明さんは自信を持って語る。「他の繊維にはまねできない、細かな色合いと紫外線カットの力。これが成功すれば、国産生糸に大きな付加価値が付けられる」。目標が現実になんて近づくと感じ、胸を高鳴らせる。

群馬の養蚕復興のため。かあ天下を築いたおばあちゃんたちを元気づけるため。絹の新たな可能性を追究する千明さん

即戦力の若者輩出

れ、県の蚕糸業関連部署や農協、製糸会社などへの就職の道が開けた。蚕業改良指導員は普及指導員養蚕担当に名称を変え、現在3人が指導員として動